
乙女は白百合の箱庭に

赤眼鏡の白チョーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女は白百合の箱庭に

【Nコード】

N8249X

【作者名】

赤眼鏡の白チヨーク

【あらすじ】

「美弥」「何智由」「…大好き」とある女子校の日常。ほんのり百合。ギャクありシリアスあり。完全作者趣味。のんびり更新していきます。よければお読みいただけたらと思います。ただ今シリアス突入しました

いち。

「ね、ね、美弥」

「何？」

「見てー我が校のアイドル、和葉さんと未羽さんだ」

「…」

「微笑ましいな〜麗しいな〜何話してるんだろう。ね、何話してると思う？」

「昼ご飯の話？」

「…や、うん。確かに弁当食べながら話してるけどさ…」

「智由、これさっきの授業をまとめといたノート」

「え！ありがとー！さっきから何書いてるのかと思ってた」

「四時限目、智由寝てたから」

「えーよくわかったね。ハゲ…じゃなくて森元先生にもばれなかったのに」

「涎でてたよ」

「…やだ恥ずかしい。お嫁に行けない」

「じゃあうちにおいで」

「…………美弥大好き！私美弥のお嫁になるー！」

「はいはい」

「美弥可愛いなあ〜」

「智由が一番可愛い」

「…もう、照れるじゃないか！」

「誰かあれどうにかしてよ」

「毎度のことながらあれが普通なのかどうかと思う」

「ああ…また美弥親衛隊がざわついている」

「…ここ女子校だよね」

に。

「美弥大変ー!!」

「智由、おはよう」

「あ、おはよう。じゃなくて!大変なの!」

「どうしたの」

「あのね、あのね。…私は見てしまったの」

「…」

「…」

「…」

「…何を、とか聞いて」

「何を」

「我が校のアイドル、和葉さんと未羽さんがね、中央ガーデンにいらっしたの」

「うん」

「お二人で朝早くからどうしたのかと思ったんだけど」

「おはよう愛里。今日の花当番だけど、昼時間私行くから」

「…むう…美ー弥ー」

「聞いてるよ。お二人がどうしたの」

「和葉さんが未羽さんの頬を触っててね…ネズミなの!」

「ネズミ?……チューしてたってこと?」

「うん。いやー…びっくりしちゃった」

「そう」

「麗しかったな…憧れちゃうなあ」

「智由」

「ん?」

「ちゅっ」

「…」

「…」

「…」

「…」

「えっ…ええええ！」

「先生来る前に英語の予習確認しよう」

「あ、う、うん。うん」

「智由、それ数学のノートだよ」

「…あれか。でこチューだから許されるのか」

「ここ教室なんだけどね」

「あれは美弥的な嫉妬なんじゃないか？」

「あの二人早くくつつけばいいのにね」

さん。

「美弥：私もうダメかも知れない」

「どうしたの」

「最近和葉さんと未羽さん観察日記してて、すっかり忘れてたけど
…もうすぐテストだよー！」

「正確には来週ね」

「美弥：どうしよう。赤点なんかとったら美弥と同じ白鳳寺なんか
行ーけーなーいー」

「…頭振ったら髪乱れるよ」

「…直して」

「はいはい」

「あーあ…やだなあ」

「智由」

「ん？」

「智由には私がついてる」

「お？」

「赤点になんかせせないよ」

「おお！さすが美弥！」

「赤点とつたら二週間私のお菓子禁止ね」

「…え？」

「だからお茶会もなし」

「み、美弥！それじゃ私生きていけないよ！美弥のお菓子がないな
んて…っ！」

「じゃあ頑張ろう？」

「うん！」

「さあ、今回の範囲の苦手分野の確認からしよっか」

「手玉にとるってこういうことを言っただね」

「笑顔の美弥って怖い…」

「美弥のお菓子おそろべし」

「智由が単純過ぎるだけだろ」

よん。

「トリックオアトリート！」

「はい」

「むぐっ…もぐもぐ…」

「…」

「…ごっくん」

「…」

「トリックオアトリート！」

「はい」

「むぐっ…ちょ、美弥どんだけお菓子持ってきてるの？」

「智由がそういつてくると思ったから」

「むむむむ…悔しい…」

「あ、智由」

「なあに？」

「トリックオアトリート」

「…え？」

「お菓子をくれないと悪戯するよ」

「あ、え、ちょちよっと待った！」

「待ったなし」

「美弥の馬鹿ー！どこ触ってるのー！」

「あれどこまでいくと思う」

「…あーあ…暴れすぎてパンツ見えてるよ」

「教室のドアから見てる親衛隊こわ…」

「ここ女子校だよね」

」。

「あれ、美弥親衛隊さんだ！おはよう」

「智由様、おはようございます」

「様付けなんかなくていいのに」

「いいえ、そういうわけにはいきません」

「あ、美弥ならハゲ……じゃなくて森元先生に呼ばれて職員室だけど
把握しております。今日は美弥様に用があるわけではございませ
ん」

「そなの？」

「このような物で申し訳ないのですが、私が本日実習で作りました
菓子を持参しました」

「いい匂い……凄い美味しそう！」

「もしよろしければ、頂いていただけないでしょうか」

「いいの？」

「はい」

「わー、マフィンだ！私の好物だよ！」

「把握しております」

「今日朝ごはん食べ忘れてお腹減ってたんだよね」

「把握しております」

「チョコとバナナどっちにしよう……悩むなあ……」

「どちらもどうぞ。美弥様用のも焼いてありますので」

「本当？私マフィンチョコとバナナが好きなんだよねー」

「把握しております」

「……………っ！」

「落ち着いて…！わかるけど、つつこみたい気持ちはわかるけど！
何でそんな細かいことまで知ってるのって思うけど！つつこんだ瞬間
にあんたの人生終わっちゃうから！」

「あれが親衛隊の情報の力なのかな」

「何でも知ってるんだね…」

ろく。

「よし、ネタキターっ！これでコミケに間に合う…！」

「愛里、さっきの授業中何書いてたのー？」

「……………」

「え、何で隠しちゃうの？」

「やだなあ、智由。誰にでも見られたくないものはあるでしょ？」

「…まさかラブレターとか！」

「授業中に恋文書く馬鹿がいるか！」

「えー違うの？じゃあ…交換日記とか？」

「や、違います」

「んむむ…じゃあ…」

「智由」

「美弥。どしたの？」

「赤坂先生に提出する、こないだのアンケート用紙でてないよ」

「…わあ、忘れてた。ありがと、美弥！出してくる！」

「……………」

「……………」

「……………」

「…な、何？美弥」

「コミケ頑張っつて」

「…っ！」

「ただ学校で年齢指定者の百合を書くときは、気をつけた方がいいよ」

「美弥何で知ってるの…！？」

「…ふっ」

「え、何そのすました笑いは何…」

「ちなみに智由のパンツはピンクって書いてたけど今日は水色だから」

「…直しておきます」

「革命！」

「ねえ、コミケって何？」

「知らないほうが良いこともあるってことだ。よし、8流し！」
「…負けた」

ばんがいへん。く長谷川と滝と鈴橋く

「…あ」

「何？」

「あー、いや。ほら、うちのクラスで有名な蓮川さん」

「ああ本当だ」

「あの話って本当なのかね」

「蓮川さんと八嶋さんが付き合ってるってやつ？」

「そうそう。珍しいことじゃないけどね」

「結構多いもんね」

「八嶋さんは親衛隊まであるし」

「おっはよー！」

「おはよ」

「何見てたの？…お、智由たん美弥たんじゃんか」

「あの二人って付き合ってるのかなーって話」

「付き合ってないよ」

「えっそうなの？」

「うん。智由たん鈍すぎて美弥たんからの愛に気づいてないと思う」

「詳しいね…」

「あ、付き合っで思い出した」

「何？」

「私恋人できた」

「「えー!?!」」

「この学校の子なんだけど」

「い、いつの間に!」

「嘘お!?!」

「近々紹介するわ。じゃねー」

「え、まっ…待ってー!」

「……本当に？」

なな。

「で、何でそんな話になったの」

「だって智由と美弥お似合いだもん」

「いける、いけるよ！」

「美弥智由か…新ネタ…」

「愛里、後で絞める」

「ご勘弁くださいいいい」

「いやいや、美弥はいいとしても私は無理無理ー」

「本人はそういつてるけど？」

「……和葉さんと末羽さんに話したら楽しみにしてるっていったけど」

「頑張りましょう！ね、美弥！」

「おお、単純」

「この組み合わせなら学祭優勝も夢じゃないね…！」

「目指せ学食無料券！」

「学食無料券目当てか」

「智由もああ言ってるし、美弥やるっしょ？」

「…まあ」

「………学祭ネタ」

「………愛里？」

「う、嘘ですうううう！」

「で、何やるの？」

「聞いてなかったの？」

「学祭のクラスの出し物」

「劇だよ」

「なんと、ロミオとジュリエットー！」

『...は？』

はち。

「智由、元気だしなつて」

「無理！和葉さんと末羽さんが見てる前でこけるなんて最悪ー！」

「あれは見事なこけっぷりだったよねー」

「でも美弥が咄嗟に抱き寄せたから大丈夫だったじゃん」

「まあ…そうなんだけど」

「一瞬二人の背後に薔薇が見えたわ…」

「え、何愛里？」

「いいえ、何でも！」

「智由、ここにいたの」

「美弥」

「一那が撮った写真くれるって」

「何その束！」

「本当？美弥の歌ってたとこの写真ある？」

「もちろんです」

「…束の写真についてはツッコミなしなのね」

「愛里、気にしたら負けよ」

「おお！よく撮れてるね…この美弥とか凄いかっこいいー！」

「この智由可愛い」

「…それ、こけてるところだけど」

「智由は何でも可愛いよ」

「美…弥…」

「…バカップル」

「把握しております。お二人ですから」

「そいえば、学祭の写真が売りに出されてたわ」

「ああ…あれでしょ。34番の写真がやたら売れたっていう」

「34番？」

「……客席で手を繋ぐ和葉さんと未羽さんだよ」

きゅう。

「寒いー学校遠いー」

「結構雪積もったね」

「智由、手袋」

「あ、ありがと。でもこれかたっぽだけだよ？」

「ん」

「…握手？」

「手」

「はい。…わ、ありがと」

「手繋いでコートのポケットに入るとか、あんたらカップルか！」

「やだなあ、愛里。美弥ならもつと可愛い子の方がいいでしょ」

「そんなことないよ」

「…や、なんかもうご馳走様だわ」

「ご飯食べてないのに、愛里何言ってるの？」

「愛里は少しおバカだから」

「そっか！」

「納得するなよ！フォローしろ！」

「おはようございます」

「あ、隊長さんおはよう」

「おはようー那」

「…愛里様、手が冷えてます」

「え、あ、ああ…」

「私のでよければ手袋を」

「え、悪いよ、隊長さんの手袋だし」

「しかし…」

「一那、こうすればいいよ」

「そうそう、繋いでポケットに入れば寒くないよ」

「ニヤニヤ笑いながら言うなよ…っ！」

「…おお、衝撃的な図」

「ついに愛里も染まつたか」

「でも相手が親衛隊隊長なのが意外だわ」

「……見てるこっちが恥ずかしくなるね」

ばんがいへん。ゝ鈴橋と田口ゝ

「お、愛里んどした？死んでる」

「…ああ、鈴か」

「珍しいね、机に俯せてるなんて。いつもガリガリ何か書いてるのに」

「あー、うん。まあ、そうなんだけど」

「コミケ間に合わなかったの？」

「いや、こないだ出した新刊はバカ売れして今増刷中よ……ってか何でコミケを知ってるの！？」

「とある眼鏡さんからの情報デス！」

「美弥だろ」

「あれま、あんま驚かないんだね？」

「慣れたよ。慣れなくなかったけど慣れたよ！そりゃ半年一緒にいればそろそろわかってくるわ」

「おー流石、愛里。慣れたね」

「いや、むしろつつこむべきは美弥の情報力でしょ……」

「あ、じゃああの噂も本当？」

「噂？」

「愛里がこの学校に染まってきたっていう」

「この学校って…」

「ま、要約すると朝からまさかの親衛隊長とイチヤイチャし…ぶおっ」

「鈴、お口チャック」

「うおお」

「ってかも噂になってるのか…っ！」

「あーびっくりした。口掴まむのは反則でしょ」

「……………」

「あれ、おーい愛里さん？」

「……………」

「愛里は死んだように俯せた！」

「…もうつつこむ気力もないわよ」

「ええ、つまらないよ！つてかこの学校では珍しくないでしょ」

「私外部生だもん」

「そっか、高校からだ和理解しにくいかもねー」

「鈴はどうなの？」

「私？私は別に。好きならいいじゃん意見です」

「…ああ、そう」

「もしかして朝から暗いのは、そのことについて考えてた？」

「…だつて」

「…だつて？」

「い、嫌じゃなかったんだもん」

「……………あー」

「……………」

「…愛里乙」

じゅう。
(前書き)

いつの間にか乙女白百合を連載して一ヶ月たちました。

評価を下さった方、お気に入り登録してくれている方々本当にありがとうございます！

これからもよろしく願いいたします（´、＊`）

じゅう。

「美弥ー」

「何」

「見て見て、雪だるま！」

「ナチュラルに何教室に持ってきてるの……」

「どこにいったかと思えば」

「えへへ朝雪積もってたからさ」

「くすつ。鼻真っ赤」

「でも教室だと確実に溶けるよ」

「……どうしよう愛里！」

「考えてなかったんかい！」

「智由、仕方ないけどこの子を元の所に帰してあげよう？」

「……美弥」

「作って見せてくれて嬉しかったよ。だから帰してあげよう？」

「うん」

「じゃあ……向坂、窓開けて」

「は、はい」

「……ふっ！」

「何故投げた!？」

「ばいばい雪だるまさん！」

「さよなら」

「え、投げたのはいいの……？感動的な別れみたくなっただけど、さっき思いつきり投げたよね？」

「愛里、何か言った？」

「いえ何もおお！」

「美弥、今度おっきな雪だるま作ろうね」

「うん。その前に体冷えたから、あったまって」

「……」

「大丈夫だ愛里、つつこみたいのはあんなだけじゃない」

「長谷川あぁ」

「あ、愛里が浮気してる！美弥美弥、写真撮って隊長さんに送る！」

「まかせて」

「浮気なんかしてないわ！」

「いい放物線を描いて落ちたね、雪だるま」

「流石美弥だわ」

「お、親衛隊が浮気を聞き付けて集結してる」

「…愛里、ガンバ」

じゅうち。

「あ、あ、あの」

「あ、おはよう、向坂ちゃん」

「お、おはよ、う。八嶋さ、んに、聞き、聞きたいことがあって」

「何ー？」

「あの、その…」

「うん？」

「す、好きって、どうやつ、てわかったの…？」

「…ん？」

「は、蓮川さんの、ことを、な、な、何で好きって、わかった、の？」

「……………好き？」

「う、う、うん」

「…好き」

「…？」

「嘘お……………」

「や、八嶋さん？」

「……………あー私美弥の事、そういうことで好きなわけじゃないんだ」
「あ……………」

「だから何とも言えないんだけど…多分、ずーっと側にいたいなあとか、こっち向いて欲しいなあとか、段々相手の事をたくさん考えるようになったら、それが好きになったって事だと思う」

「相、手のこ、事を考え、る…」

「…うん」

「あ、あ、ありがと、う」

「ううん、参考になるかわかんないけど」

「そ、そ、それ、じゃあね」

「じゃーねー」

「…………私が、美弥を、……」

じゅん」。

「痛っ」

「おはよう愛里」

「……おはよう美弥。雪玉ぶつけなくてもいいじゃん……なんか、元氣ない？」

「……まあね」

「智由と喧嘩でもした？」

「してない」

「だよ、するわけないね……。でも最近朝一緒じゃないよね」

「……多分？」

「避けられてる」

「嘘！え、智由が？」

「うん」

「何で？」

「さあ？」

「……さあってあんた……」

「避けたい理由があるならしょうがない」

「そうだけど……でも」

「二人ともおはよー」

「おはよ」

「……あれ愛里さん何か今日の美弥さんは静かだね」

「そうなんですよ長谷川さん。今日の美弥さんは静かなんですよ」

「……そんなにわかりやすい？」

「わかりやすいってか、智由いないし、美弥の愛里への毒舌がないし」

「……長谷川、判断基準を間違えてないか？」

「あはは。まあ元気出してね！」

「ちょ、長谷川！笑ってごまかすな！」

「私を捕まえてごらん」

「待てごらん！」

「…二人とも、ありがとう」

じゅっさん。

「いやあ、いいよねー」

「それに関しては否定しないわ」

「……鈴と長谷川…鈴長谷か」

「愛里ん、こつち見てどした？」

「えっいや、何話してるのかなと思って」

「ああ…向坂ちゃんの胸のサイズが羨ましいって話」

「横の席から見てただけ、あの調度いいサイズいいよね！」

「あんたたちねえ」

「愛里はあんまないよね」

「放っておけー！」

「よしよし」

「ハセにくつついてたらまた浮気だーって騒がれるよ」

「……嫌な忠告ありがとう」

「まあ変な話、有澤のは大きすぎるよね」

「あー、わかる。肩疲れそうだよ、有たんのは」

「有澤…？」

「隣のクラスのツンデレ女王」

「真白ちゃんに相手にされなくて、一度食堂で大暴れしたんだよね」

「」

「ああ、あの喋り方変わってる子か」

「そうそう。八嶋さんと仲良いらしいけど」

「同じ中学だっけ。智由たんと言えばここ最近静かだよ」

「何か、美弥のこと避けてるみたい」

「嘘お、蓮川さん？」

「読めた……読めたよ！」

「……何急に」

「遂に、智由たんが美弥たんへの気持ちに気づいたんだよ！どうしよう…私こんなにも好きだったんだ…恥ずかしくて美弥の目が見れないわきゅるん！」

「きゅるるんって」

「あ、あ、あの………」

「ありえるかー？凄いい今更感があるけど」

「あ、あれ、あ、の、あのー」

「つか、どうやって気づいたんだって話だよね」

「………あ、あ、」

「じゃあやっぱりさ」

「あのー！ー」

『………向坂？』
ちやん

じゅっよん。

「で、何の用ですの」

「うっー……」

「珍しく顔を出したと思えば……」

「まあまあ、いいじゃないたまには」

「いつもは美弥さんにべったりじゃありませんか」

「……今はこう、一緒に居づらいというかー」

「困った幼なじみですわね。まあ、久々に話すこともございますし」

「ありがとうございますー！」

「……そのあだ名辞めません？」

「え、何で。可愛いよ」

「この歳にもなってアリスと呼ばれるのは複雑ですわ」

「だって金髪だし、昔アリスみたいな水色のワンピース着てたじゃんか」

「へえーその話詳しく聞きたいなあ」

「……誰？このイケメンさん」

「雛乃の恋人です。よろしくね智由ちゃん」

「違いますわ！誰が恋人ですか！」

「またまた照れちゃって。ほーんと、可愛いなあ」

「冗談が過ぎますわよ、佐藤」

「………あー、何か何となくわかったよ」

「わかってほしくありませんでしたわ……」

「困ってる雛乃も可愛いっしょ？」

「その口を閉じなさい！」

「お、智由たん」

「あ、鈴」

「……えと、向こうの凄い騒動はいいの？有澤さん椅子投げてるけど」

「……皆、悩みを抱えて生きているんだよ」

羽は舞い葉は散る。それは消えていく時間の傍らに

泣き虫な私も
嘘つきな私も
臆病な私も

愛してくれて、ありがとう。
さよならが言えない私を、どうか許して。

「どうだ、素敵な人だろう」
「和葉には勿体ないくらいだわ」
目の前で笑っている人達が他人のように見えるのは、どうしてだろう。

「よかったな」
「……何が？」
私はぼんやりと、自分の親を目に写した。

「変な顔してる」
抓られた頬の痛みに気づいた時、目の前にはいつの間にか笑っている少女が、いた。
覗き込む様に顔を前に出してきたので、ポニーテールにした髪がさらさらと流れた。

「和葉？」
嗚呼。ここは学校だ。
放課後になっても動かない私を、ずっと待っていてくれたんだろう。

夕日に照らされた細い睫毛と、リップで濡れた唇と、少しきつめに流れる瞳を見た時、私はやっと声が出せた。

「……未羽」

「ん？」

名前を呼べば、返してくれる、私の親友。

「……未羽」

まるで、それしか言えないように私は未羽の名前を繰り返した。

未羽、未羽、未羽、未羽、未羽……

未羽は何もいわず、ずっと私の手を握ってくれた。

その優しさが嬉しくて、悲しくて。

手に入らないとわかってしまったから。

心が叫び続けていた。

羽は舞い葉は散る。ゝ影は離れることなく伸びていくゝ

何故だろう。

たまに和葉がいなくなっちゃうんじゃないかと、思うのは。

「未羽さん、よければ食べてください!」

廊下を歩いていると、下級生がクッキーを差し出してきた。

……チョコクッキーか。

「ありがとう」

笑いながら受け取ると、下級生は友達と騒いだ後、頭を下げて廊下を走っていった。

健気だねえ、女子は。

クッキーを片手にうちは、外へと向かう。

「…ごめんね」

ぽつりと呟いて、焼却炉にクッキーを投げ入れた。

ついでに、朝靴箱に入っていた手紙も燃やす。

燃えたのを確認して、また足を校舎へと向けた。

愛するのも、愛されるのも一人だけでいい。

たった、一人。

何を犠牲にしてもいいから、手に入れたい人がいる。

うちの世界は、その人だけでいいのに。

「本当、雑音が酷い」

全てが、雑音だ。

「和葉？」

教室を空ければ居るはずの人の姿はなく、がらん、とした空間だった。

和葉がいない。

「」

たったそれだけで、胸が騒ぐ。

頭はすぐに、和葉が行きそうな場所を探しだし、体は教室の外へと足を進める。

「あ、未羽」

廊下を走り出そうとした時、向こうから歩いて来る姿に足が止まる。

「部活お疲れ様。ごめんね、先生に呼ばれてて」

女子にしては少し高めで細い声が、廊下に響いていく。

「いやあ、どこ行っただかと思っただじゃん」

笑いながら、うちからも和葉に近づく。

ショートボブの髪に隠れるように大きな瞳と薄い唇が見える。

「……………キスしたい。」

そう思いながら、小さな身体をそっと抱きしめた。

何処にも行かないで、私の鳥。

羽は舞い葉は散る。く空気がないなら貴方を下さいく

苦しいね。

まるで水の中にいるみたいに。

息ができない肺の苦しさが、私に生きてる事を教えてくれる。

カリカリ、とシャープペンシルが走る音がする。

「あ、そだ。バナナクッキー食べたい」

「バナナクッキー？」

「うん。和葉が作ったやつね」

突然顔を上げて真剣に言ったと思えば、そんなことだった。

「わかった。次の休みね」

「やった」

えへへ、と嬉しそうに笑う未羽を見ていたら、何だか私も嬉しくなる。

またシャープペンシルを持つと、広げていたノートに影が写った。

「あの……」

もしもじと手を動かしながら声をかけてきたのは、隣のクラスの子だった。

咄嗟に未羽を見ると、眉間に皺を寄せながら女の子を見上げていた。静かな図書室に囁くような声が右左に生まれる。

「……向こう行こう」

立ち上がって女の子と図書室を出ていく未羽の後ろ姿を見ながら、どうしようもなく辛くなった。

ノートに視線を戻しても、中々集中できなくて。目を閉じれば、片隅にある人の顔を思い出した。

「和葉には勿体ないくらいだわ」

「よかったな」

止めて。

「始めまして」

止めて。

「和葉さんですよね」

止めて。

「よろしくお願いします」

笑わないで。

優しくしないで。

溺れて息が出来ないから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8249x/>

乙女は白百合の箱庭に

2011年12月21日15時45分発行